

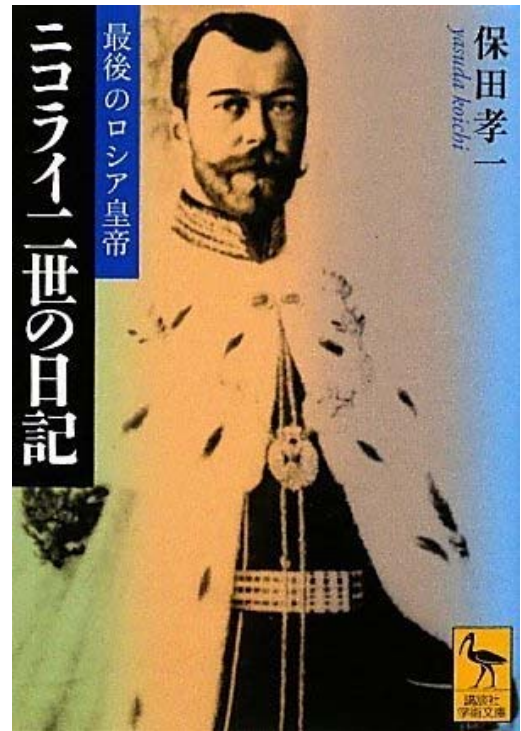
5. 皇太子ニコライの来日

1. ニコライ 2 世の日記

ロシア帝国最後の皇帝ニコライ 2 世 Николай II, Николай Александрович Романов (1868 年 5 月 6 日～1918 年 7 月 17 日) は 51 冊の日記を書き残しており、1882 年 (14 歳) から銃殺される 3 日前の 1918 年 7 月 13 日の分まで現存している¹。

ニコライ 2 世の日記はモスクワのロシア連邦国立アルヒーフ (史料館) に保存されており、1983 年 9 月 (当時はソ連中央国立十月革命史料館)、外国人として初めて保田孝一岡山大学教授 (当時) が閲覧した²。

その後、保田孝一は、『最後のロシア皇帝 ニコライ二世の日記』³を書き、ニコライ 2 世は、「大津で津田三蔵に斬りつけられたことを根にもち、日本人を『猿』と軽蔑し、日露戦争を仕掛け、日本を征服しようと望んだ」人物であったという俗説⁴を覆すニコライ 2 世像を描き出した。



2. 皇太子ニコライ (当時 22 歳) の訪日 (1890 [明治 23] 年 11 月 4 日～1891 年 8 月 16 日)

2.1. 全日程

1890 年 11 月 4 日、当時 22 歳であったロシア帝国皇太子ニコライ (のちのロシア皇帝ニコライ 2 世) は、遠いロシア極東のヴラジヴォストークで行われるシベリア鉄道起工式に父親であるロシア皇帝アレクサンドル 3 世の名代として出席するために、ロシア海軍巡洋艦「アゾフ記念」(Память Азова) 号⁵で、オーストリアのアドリア海に面するトリエステ港 (現イタリア領) を出港した⁶。

皇太子ニコライを乗せた「アゾフ記念」号は、まず最初にギリシアに寄港し、ここで皇太子ニコライのヴラジヴォストークまでの旅行に同行するギリシア王子ゲオルギオス⁷ (右上の写真の左の人物。右はニコライ) を乗船させている。



¹ 保田孝一『最後のロシア皇帝 ニコライ二世の日記 増補』朝日新聞社、1990 年、7-8 頁。

² 同上、6 頁。

³ 現在、容易に入手可能なのは講談社学術文庫版 (保田孝一『最後のロシア皇帝 ニコライ二世の日記』講談社、2009 年) である。これは、注 1 記載の、朝日新聞社から 1990 年に刊行された朝日選書版の再版である。以下、本稿における同書からの引用は、朝日選書版による。

⁴ 保田、前掲書、263 頁。

⁵ この「アゾフ記念」号という艦名は、ギリシア独立戦争に際してギリシアのナヴァリノ湾でオスマン帝国艦隊と英仏露連合艦隊とのあいだで行われた 1827 年の「ナヴァリノの海戦」で活躍したロシア軍艦「アゾフ」(Азов) 号の荣誉を称え、それにあやかって名付けられたものである (Морской энциклопедический справочник, 1986)。従って、「アゾフ記念」号を、保田の著作を含め複数の文献が「アゾフ」号と略記しているが、「アゾフ」号は別の軍艦の名称であるから、「アゾフ号」と略記すべきではない。

⁶ 皇太子ニコライのヴラジヴォストークまでのおもな寄港地については、保田、前掲書、9 頁および Терюков А. И. Путешествие на восток (<https://web.archive.org/web/20080925062211/http://www.avit-centre.spb.ru/exb/06/kor/k2.htm>) を参照。

⁷ ギリシア王子ゲオルギオス (Πρίγκιπας Γεώργιος της Ελλάδας 1869 年 6 月 24 日～1957 年 11 月 25 日)。父親はデンマーク王子からギ

その後、エジプト（ポートサイド）、スエズ運河、インド（ボンベイ、その後は陸路でアグラ、ラホール、アムリツァル、ワーラーナシー、コルカタ、マドラスを訪問）、スリランカ（コロombo）、シンガポール、インドネシア（ジャカルタ）、タイ（バンコク）、ヴェトナム（ホーチミン）、中国（香港、南京、武漢）に寄航し、1891年4月27日、日本の長崎に到着した。長崎には5月5日まで滞在し、その後、鹿児島、神戸、京都、大津に立ち寄り、5月11日に、いわゆる大津事件が起き、東京訪問の予定を切り上げて、5月19日に最終目的地のブラジヴォストークに向かって神戸港を出港している。

2.2. 『お菊さん』

長崎到着の2日前の4月25日、皇太子ニコライは、長崎寄航への期待に胸を膨らませて次のように書いている。「私の心はずっと以前から長崎にある。予定より2日前に長崎に到着できるのがうれしい。そこでの停泊はすばらしいという話だ」。

1855年2月7日に「日魯通好條約」（日露和親条約または下田条約）が締結されてから3年後の1858年11月に長崎の稲佐地区にロシア海軍病院⁸が設置されて以降、長崎は太平洋海域のロシア海軍艦艇の補修地および将兵の保養地となっていたことから、ロシア海軍にはなじみの土地であり、長崎に滞在する海軍将兵への慰問も兼ねて、皇太子ニコライの日本での最初の寄港地として長崎が選ばれたと考えられる。なお、長崎到着時のロシア軍艦は、「アゾフ記念」号を含めて7隻の艦隊であった。

さらに翌4月26日、皇太子ニコライは、その日記に興味深いことを書き留めている。「日本旅行の準備のために『お菊さん』を読み始めた」。

この『お菊さん』というのは、当時、日本趣味が流行っていたフランスなどで読まれていたピエール・ロティ（Pierre Loti）、本名ルイ・マリー＝ジュリアン・ヴィオー（Louis Marie-Julien Viaud, 1850年1月14日～1923年6月10日）の書いた小説である⁹。ピエール・ロティは現役フランス海軍士官であり、作家でもあった。ロティは、1885年と1900年に長崎に滞在しており、1回目の滞在経験をもとに、日記形式の小説『お菊さん』を書いている。現代日本人の立場からこの小説を客観的に評価するのは難しい。

「かれは皮肉たっぷり、日本人のすることなすことに驚き呆れて見せて、さんざん日本と日本人の悪口を言っている。だが、じっさいに目に映ったこと、耳に聞こえたこと、舌で味わったことを、一切の感傷を排して率直に写生的に書き記したことも事実で、そこからかえって、お菊さんへの情愛、長崎への愛着が色濃くにじみ出ているように感じられる。しかも、同じ作品の中に、かれがお菊さんの母親の家を見て、その当時フランスの上流階級で流行っていた過度に華美な装飾としての Japonisme（日本趣味）は偽物だと断ずる箇所があることから、日本的な簡素の美という



ロシア国王となったゲオルギオス1世（Christian Wilhelm Ferdinand Adolf Georg, Γεώργιος Αττης Ελλάδας, 1845年12月24日～1913年3月18日）、母親はロシア皇室出身のオリガ・コンスタンチノヴナ（Ольга Константиновна, 1851年9月3日～1926年6月18日）で、ロシア皇帝アレクサンドル2世（Александр II, Александр Николаевич Романов, 1818年4月29日～1881年3月13日、ニコライ2世の祖父）の弟コンスタンチン大公（Константин Николаевич, 1827年9月9日～1892年1月13日）の娘である。また父親のゲオルギオス1世の妹 MARIA は皇太子ニコライの母親である。従って、皇太子ニコライとギリシア王子ゲオルギオスは従兄弟（いとこ）同士である。

⁸ 1858年から1906年にかけて長崎にあったロシア海軍病院については、Павлов Дмитрий Борисович, Русский военно-морской лазарет в Нагасаки, 1858–1906 гг. (исторический очерк по российским источникам), Япония. Ежегодник, Выпуск: № 39, 2010, с. 252–273 を参照。

⁹ 根津憲三による訳が1952年に白水社から、関根秀雄による訳が1954年に河出文庫から、野上豊一郎による訳が1988年に岩波文庫から、それぞれ出版されている（いずれも著者名はピエール・ロチとなっている）。

ものがたしかにあることが、かれにはわかっていたことがうかがわれる」¹⁰といった評価がある一方で、「あまりにも日本や日本人をこきおろしており、差別用語大満載の書物」¹¹との評価もある。また、米国人ジョン・ルーサー・ロングが小説として書き、米国の劇作家デーヴィッド・ベラスコが戯曲とし、これらに基づいてプッチーニが作曲したオペラ『蝶々夫人』もそうだが、「現地妻」という、現在の立場からするとジェンダー論的に大いに問題となる存在を肯定的に描いていることなどもこれらの作品が厳しく評価される理由かも知れない。しかし、少なくとも、皇太子ニコライはこれを読んで、ますます長崎と日本の訪問に胸をふくらませていたことが、その日記からは窺われる。

記念すべき日本初上陸の日となった4月28日、皇太子ニコライは、その日記に次のように書いている。「12時にプリンス有栖川宮がフリゲート艦¹²にやってきた。若い海軍士官だ。彼は1889年にガッチナ宮（ペテルブルグ郊外の離宮）を訪れたことがある。好感の持てる人物だ」。

このプリンス有栖川宮とは、有栖川宮威仁（ありすがわのみやたけひと）親王（1862年2月11日～1913年7月5日）で、当時の皇族であり、海軍軍人でもあった。彼は、1881年1月9日から1883年6月6日まで英国海軍大学留学および仏米訪問をおこない、また1889年2月から1890年4月まで米、仏、英、露、スペイン、スイス、北欧各国歴訪をおこなっている。彼は、こうした国際経験、とりわけロシア訪問時に皇太子ニコライと会っているという経歴を買われて、皇太子ニコライの接待役を命じられたのである。なお、いったんは皇女和宮と婚約したものの、公武合体論により和宮は14代将軍徳川家茂に降嫁することになったため、和宮との婚約を破棄された有栖川宮熾仁（ありすがわのみやたるひと）親王は異母兄である。

2.3. 長崎の印象

有栖川宮威仁親王に出迎えられて皇太子ニコライは長崎に上陸する。ニコライは、長崎の印象を日記に次のように書いている。「長崎市の家屋と街路は、素晴らしく気持ちのよい印象を与えてくれる。至るところ掃除が行き届き、小ざっぱりしていて、彼らの家の中に入るのが楽しい。日本人は男も女も親切で愛想がよく、中国人と正反対だ。とくに驚いたのはロシア語を話す人が多いことだった」。

このくだりの最後の2文については、少しばかり説明が必要であろう。

「日本人は男も女も親切で愛想がよく、中国人と正反対だ」というニコライの記述から、中国人は外国人に対して不親切で無愛想だと、中国人を否定的に評価してしまうのは、いささか公平性を欠く。というのは、当時の中国の置かれていた状況を考えれば、中国人が外国人に対して不親切で無愛想であったことも合点がいくからである。確かに中国は、1840～42年のアヘン戦争で英国に侵略され、さらに1856～60年のアロー戦争では英仏に侵略され、ひどい目に遭っているのである。そんな経験をしている中国人が、同じ欧州のロシアの皇太子に親切で愛想がよいというのは考えにくい。それに対して、日本人は、それほど外国からひどい目に遭ったという経験はしていない。

さて、もう一つ説明が必要なのは、「とくに驚いたのはロシア語を話す人が多いことだった」という部分である。すでに述べたように、長崎は、太平洋海域のロシア海軍艦艇の補修地および将兵の保養地であった。ということは、一定期間のあいだ、ロシア海軍の将兵たちが長崎で生活していたということである。実際、長崎の稲佐地区には、士官用の住宅があり、彼らの多くは現地妻をめとり、日本人を女中、下男、従者などとして雇用し、また出入りの御用聞きや商人も少なくなかったはずである。またすでに述べた病院のほか、水兵向けの遊興施設・保養施設などもあったことがわかっている。そうした施設でロシア人を相手にする日本人の多くがロシア語を話すことができたのは当然である。

4月28日、ニコライは7軒の商店を訪れている。その一つ、江崎鼈甲店¹³には、そのときにニコライが名刺代

¹⁰ <http://goodfeeling.cocolog-nifty.com/camarade/cat7795767/index.html>

¹¹ <http://www.yamashina-mashiro.com/book3/ques.cgi?no=64&mode=qaview&resmode=on&page=0>

¹² 「アゾフ記念」号のこと。

¹³ 1709年創業の鼈甲専門店の老舗。サンクト・ペテルブルクの中央海軍博物館に、皇太子ニコライが5代目江崎栄造から贈られた

わりに与えた「善人江崎栄造殿 皇太子ニコライ」と書かれた肖像写真が現在でも残っている¹⁴。

そして、この日、ニコライは、日記に、これまた大いに興味深いことを書いている。「昼食のあとに、右腕にドラゴン（竜）の入れ墨をする決意をした・・・ドラゴンは見事に彫られており、腕はまったく痛まなかった」。なんと、ニコライは、長崎で腕に竜の入れ墨をしたのである。

5月4日、皇太子ニコライは、日記に次のように書いている。「食後に密かに艦を抜け出て、ゲオルギウス、ゴリツィン（長崎駐留の将校）らと一緒に稲佐村のゴリツィン宅へ直行した。そこで何人かの将校の奥さん（日本人妻）と知り合いになった。・・・彼女たちの間に座る。彼女らはみなロシア語を喋り、非常に好感がもてる」。ロシア語を話す人が多いというのはすでに日記にも書かれており、筆者がその理由を説明したが、この記述はそれを裏付けるものである。そして何よりもニコライが長崎滞在を楽しんでいる様子がうかがえる。そして、その後ニコライは、日本側の内務省史料などによると、ロシア仕官寄宿所、福田半造方に行き、そこで芸舞妓5名を招き、5日午前4時に帰艦したとのことである¹⁵。22歳のニコライのまさに青春の一コマといってよいであろう。

2.4. 大津事件

そのあと、ニコライの日記によると、5月6日には、鹿児島島の島津忠義邸を訪問している。このとき忠義がニコライに贈呈した薩摩焼の壺が、サンクト・ペテルブルクのエルミタージュ美術館に残されている。島津忠義・忠重親子はその後も日露交流を推進したことがわかっている¹⁶。

さらに、5月9日には神戸に入港し、ここで上陸して午後6時過ぎに列車で京都に到着している。京都では、京都市盲啞院を訪問し、京都市に2,000円を寄付したことがわかっている¹⁷。ニコライは、京都では常盤ホテル（現在の京都ホテル）に宿泊している。ニコライには初め洋室があてがわれたが、彼はそれを断り、日本間に泊まったという¹⁸。その建物は現在の安養寺に移築されている¹⁹。また京都市内では、西陣の川島織物を見学したことがわかっている。このとき、二代目川島甚兵衛が製作した綴織（つづれおり）を背景に写真を撮影している（写真は現存）。夜は、八坂神社近くの祇園のお茶屋「中村家（現在の中村楼）」を密かに訪ねており、その部屋も現存している。

さて、5月11日は、ニコライは、琵琶湖遊覧に出かけている。そして、その帰途、大津町（現、大津市）で警衛中の滋賀県巡査・津田三蔵に斬りつけられ、頭部に軽症を負ったが、同行のギリシア王子ゲオルギオスと二人の車夫に助けられた。これが、有名な「大津事件」²⁰である。

事件は、ニコライ一行を一目見ようと見物客でごった返す市街地の旧東海道を左折したところで起きた。犯人を取り押さえたのは、車夫の北賀市市太郎、向畑治三郎の二人で、のちに彼らにはニコライから勲章が与えられている²¹。琵琶湖文化館には、このときのサーベルと



龍甲（べっこう）製の「アゾフ記念」号の模型が残されている。

¹⁴ 保田、前掲書、24頁。

¹⁵ 同上、32頁。

¹⁶ 同上、40頁。

¹⁷ 『京都府誌 上』京都府、1915年、708頁。

¹⁸ 「京都ホテル100年ものがたり 第一部前史編 12.ニコライ皇太子」（http://www.kyotohotel.co.jp/100th/1st_zenshi/no12.html）。

¹⁹ 同上、「15.大津事件余聞」（http://www.kyotohotel.co.jp/100th/1st_zenshi/no15.html）。

²⁰ 大津事件についての同時代の記録は、尾佐竹猛『大津事件』岩波文庫、1991年に詳しい。

²¹ 保田、前掲書、57頁。

血染めのハンカチが残っている。実は、このハンカチに残されたニコライの血痕は、ボリシェヴィキ政権成立後の1918年7月17日に射殺されたニコライ2世とその家族の遺体が第2次世界大戦後、処刑地のエカチェリンブルクのイパチェフ邸の近くの森で発見され、1994年にDNA鑑定により間違いなく本人のものとされたときのDNA鑑定の材料に使用されている。

この日、ニコライは、日記にこう書いている。「有栖川宮殿下その他日本人の茫然とした顔を見るのはつらかった」。

そして、5月13日には、次のようにも書いている。「日本のものはすべて4月29日（大津事件のあった日の露暦）以前と同じように私の気に入っており、日本人の一人である狂信者がいやな事件を起こしたからといって、善良な日本人に対して少しも腹を立てていない」。ニコライは、後世になって日本人がこの日記を読むことを想定して日本人にお世辞を使っているわけではない。この日記には本心が書かれていると考えてよいであろう。だとすれば、大津事件の結果、ニコライ2世は日本人嫌いとなり、それが日露戦争開戦の一つのきっかけになったというのは、まちがった説であることがわかる。

また、この日、明治天皇が東京から急遽京都の宿舎に見舞いに駆けつけている²²。まだ新幹線もなかったこの時代に天皇が東京から京都に急いで見舞いに駆けつけるというほどの大事件であったわけである。

大国ロシアの皇族を日本の警察官が襲うという前代未聞のこの事件で、国内は騒然となったが、天皇の見舞いを皮切りに、日本全国からさまざまな見舞い品がニコライのもとに届けられている。京都では、川島織物の川島甚兵衛が謝罪の気持ちを込めて、双頭の鷲（ロシア皇室の紋章）と菊の紋章（日本の皇室の紋章）が描かれた縁取りのある、「犬追物」の図柄の、畳6畳敷きほどの大きさの綴織壁掛を寄贈している。これはエルミタージュ美術館に現存しており、職人が7人がかりで1年半の歳月をかけて制作されたと言われている。また川島は等身大の舞妓人形も贈ったとされる²³。いずれにせよ、綴織壁掛は美術品として見ても見事な作品で、これをきっかけに、川島織物はロシア皇室御用達となっている。また寺院の灯籠が1対贈られたが、これは徳川ゆかりの東京の増上寺清揚院殿のものと言われている。

他方、日本政府は、この事件によりロシアとの関係が悪化することを恐れ、内閣・元老らを中心に、犯人に対して旧刑法第116条（大逆罪）を適用する動きがあったが、大審院院長・児島惟謙（こじま・これちか）が通常謀殺未遂を適用するよう主張し、その結果、1891年5月29日、大審院は無期徒刑（懲役）の判決を下した。この判決後、青木外相は辞職し、後任には初代ロシア公使だった榎本武揚が任命された。

事件の5日後の5月16日、ニコライは、日本旅行（東京訪問）を中止しヴラジヴォストークへ直行せよとの本国からの命令を受けとっている。この命令によってニコライは、東京訪問を断念せざるを得なかったわけであるが、この東京訪問の中止は彼にとって非常に残念なことであつたろうと推測される。

ニコライ日本滞在最後の日となった5月19日には、明治天皇が「アゾフ記念」号に行幸している²⁴。天皇が、少数の護衛だけを伴って外国軍艦に乗船するというのもまた前代未聞の出来事であつたろう。ニコライは再度天皇の謝罪を受け、後ろ髪を引かれる思いで離日したと思われる。この日までに多くの市民からの見舞いが届いたとの記録が残されている。

3. ニコライ2世と日露戦争

ニコライが大津事件に遭ったことで、日本嫌いになり、のちの日露開戦の遠因となったという俗説があることはすでに指摘したが、こうした俗説を広めるのに大いに貢献した例として、司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』²⁵がある。司馬遼太郎は書いている。「ニコライ二世は、平素、日本および日本人ということばが出るとき、『猿』というあだ名でよんだ。ウィッテによれば公文書にまでこの皇帝は『猿』とかいた。かれは即位する以前から日

²² 同上、49頁。

²³ 同上、49頁。

²⁴ 同上、58-59頁。

²⁵ 『産経新聞』夕刊紙上で、1968年4月から1972年8月にかけて連載された。

本人に対し、生理的とまでいえる憎悪をもっていたことを、ウイッテも触れている。この憎悪は、皇帝にとって終生のものであった」²⁶。この小説は、NHK によってドラマ化され、2009 年 11 月 29 日から 2011 年 12 月 25 日にかけて断続的に 90 分全 13 回の連続ドラマとして放送された。もちろん、小説やドラマはフィクションだからと免罪することもできる。

しかし、啓蒙書・学術書となると、そうはいかない。日本でも数多くの研究書が翻訳出版されているフランスのロシア史家エレーヌ・カレル＝ダンコースは、『甦るニコライ二世：中断されたロシア近代化への道』（藤原書店、2001 年、原著は 1996 年出版）の中で、大津事件について次のように書いている。「大津で一人の日本人青年が皇太子に襲い掛かり、サーベルの一撃で頭がい骨に裂傷を与えた。傷は比較的深く、傷痕と頭痛を残すことになるが、脳にまでは達していなかった。この襲撃事件の真相は決して分からず、矛盾する説明がなされた。神域での皇太子の態度が尊敬の念を欠いていたと判断して激昂した日本人の犯行説？ 若い日本婦人にしつこい視線を送ったことへの嫉妬心からの犯行説？ ともあれ、この思慮を欠いた行為の説明がどうであろうとたいした問題ではない。その代わり、事件が及ぼした結果は検討に値する。1881 年のテロ事件以来、ニコライは、爆弾で手足を吹き飛ばされて瀕死の状態だった祖父の思い出と、テロ襲撃への恐怖心にさいなまれていた。自ら体験したばかりの襲撃事件は、辺りに潜む危険と、それから身を守るために必要な権威についての妄想をいっそう深めさせた。その上、ニコライはアジアにも日本にも好奇心を抱いたことは決してなかった。彼の極東旅行は、読書によっても、いかなる考察によっても準備されなかった。彼にとって、日本は奇妙で、未知で、敵意を含んだ世界だった。大津事件は、彼が理解しようと努力しなかった国に対する嫌悪感を強めさせ、日本人は野蛮人であると確信を深めさせることになる。以後、彼は軽蔑を込めて日本人を『猿』扱いすることになる。この軽蔑心は、日露戦争当時に優越感と無分別さとなって彼の行動に現れることになる。（中略）若きプリンスがアジア的なもの全てに敵意を抱き、『猿ども』が住んでいると考えているこの宇宙で中国人と日本人の判別も不可能だったことを考えるならば、彼が自分に課されている義務を果たすやいなや、文明の天国であるペテルブルクに向け出発を急いだことは想像に難くない」²⁷。

数多くの翻訳が出版されている世界的に著名な歴史家だからと言って、書いていることすべてが正しいわけではないという好例がここにある。カレル＝ダンコースは、この著作の中で、ニコライの日記について言及してはいるものの、この引用部分を見ただけでも、おそらくニコライの日記を直接に読んでいないし、ニコライの日記に関するすぐれた研究書にもあたっていないと想像できる。いずれにせよ、「ニコライ二世」の名を冠したこの著作が、少なくとも来日時の皇太子ニコライの実像にはまったく迫っていないことだけは確かである。さらに言えば、大津事件が原因でニコライ 2 世が日本嫌いとなり、日本人を「猿」呼ばわりしているという俗説が、フランスの学者によっても信じられているということのほうがむしろ興味深い。

すでに見てきたように、事件当時のニコライの言動や日記等には、ニコライがもともと日本嫌いであったとか、大津事件の結果、日本嫌いになったとか、ということを示すものはまったく見当たらない。

そしてさらに、本人の日記の記述以外にも、大津事件の後ニコライの日本に対する感情が変化しなかったことを伝える資料は少なくない。例えば、1891 年 8 月にペテルブルク郊外に帰着したニコライを出迎えた日本の西徳二郎駐露公使は、「我邦ニ対シテ悪シキ感シハ毛頭保タレサル趣」（我が国に対する悪感情はまったく持っていない様子である）と報告している（西公使より榎本外務大臣宛機密報告第 15 号「露国皇太子待迎ノ件」）²⁸。また、翌 1892 年 1 月 20 日、西公使がアニチコフ宮殿にニコライを訪問し、明治天皇の親書、日本の古い武器一式などを贈呈した際、ニコライは、「おほ（お）きにありがた（と）う」と日本語で感謝の意を伝え、「予ハ貴国ニ対シテ誠ニ好キ感情ヲ保テリ」（私は貴国に対してとても良い感情を持っている）と繰り返し述べたことが報告されている（西公使より榎本外務大臣宛機密報告第 1 号、1892 年 1 月 21 日）²⁹。

²⁶ 司馬遼太郎『坂の上の雲』文春文庫新装版、第 2 巻、347-348 頁。

²⁷ エレーヌ・カレル＝ダンコース『甦るニコライ二世：中断されたロシア近代化への道』藤原書店、2001 年、74-75 頁。

²⁸ http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/j_russia_2005/2_2.html

²⁹ 同上。

上記の西徳二郎駐露公使の報告から、少なくとも、当時の日本政府は、ニコライ 2 世（1894 年に皇帝即位）が反日的ではなく、日本に好感を持っているということを認識していたと考えてよいであろう。しかしながら、その事実は、広く明らかにされることはなく、むしろ隠蔽さえされた可能性がある。

他方、ニコライの日記には、開戦直前の日露関係についての具体的記述は少なく、日露戦争開戦が近いという切迫感が感じられない。当時のニコライ 2 世は、外交・安全保障政策の立案や遂行から切り離されていたとも推測できる。とはいえ、1904 年 2 月 9 日開戦時の日記は、「日本軍の厚顔な行為」と記しており、津田を狂人と書いた以外のもう一つの日本人に対する罵りの言葉が綴られている。これは、2 月 10 日の宣戦布告前の日本海軍による攻撃などに対する強い非難と理解することができる。

4. ロシアと長崎³⁰

皇太子ニコライが 1891 年 5 月に立ち寄った長崎の稲佐地区が、ロシア人から「ロシア村 Русская деревня」と呼ばれるまでになったのは、ニコライ訪日の 30 年以上前の 1858 年以降、長崎にロシア海軍将兵が滞在し、医療施設、保養施設、遊興施設等が置かれて以降のことである。ロシア艦隊は、その後も常に長崎港における医療環境の向上に関心を寄せ海軍病院の拡充に努めバーニャ（ロシア式サウナ風呂）を設置した他、修繕所（バツテラや帆布用）等の小規模施設を置いて艦隊の便宜を図った。そして、周辺には、ロシア海軍士官の住宅、ロシア海軍軍人向け商業施設や料亭（諸岡まつの経営する Бóлша が有名）、「ロシア将校集会所」や上述「魯西亜マタロス休憩所」等の遊興施設などがあって、ロシア海軍関係者で賑わっていた。

すでに書いたように、ロシア海軍士官は、その住居に「現地妻」を置いている者もあり、女中、下男、従者など日本人雇用者もいたため、皇太子ニコライの訪日当時、すでにロシア語を解する多くの日本人が稲佐にいたと考えられる。温暖で風光明媚、文化的水準の高い長崎、とりわけその稲佐地区は、極東に勤務するロシア・エリートたちにはよく知られた場所で、皇太子ニコライ訪日後の 1890 年代半ばには、ロシア人向けホテル Весна（「春」の意。経営者は道永えい＝稲佐お栄、のち諸岡まつが経営）さえ開設されている。

こうした、長崎稲佐地区の繁栄は、イギリスをはじめとする各国との間に結ばれた通商航海条約の発効により、1899 年、「不平等」条約が一部改正され、領事裁判権が撤廃されて居留地が廃止されるまで続いた。

日露戦争後、捕虜となったロシア海軍士官・水兵 9,000 人以上が稲佐地区に滞在していたことも知られている。稲佐にある悟真寺は現在でもロシア人墓地があることで有名で、このロシア人墓地には、ゴルバチョフ・ソ連大統領が 1991 年に訪日した際に訪問している。悟真寺とロシアとの縁はプチャーチン来航時の宿泊先だったことに起因している。

³⁰ ロシア艦隊と長崎の関係については、とりあえず、注 8 に挙げたロシア語文献のほか、宮崎千穂「不平等条約下における内地雑居問題の一考察ーロシア艦隊と稲佐における「居留地外雑居」問題ー」『国際開発研究フォーラム』27（2004 年 8 月 <http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/bpub/research/public/forum/27/04.pdf>）および同「外国軍隊と港湾都市ー明治 30 年代前半における雲仙のロシア艦隊サナトリウム建設計画を中心にー」『スラヴ研究』No. 55（2008 年 <http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/39242/1/55-008.pdf>）を参照。後者には、各年のロシア艦隊入港回数など貴重な統計も示されている。